

# かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)

電話 66-1311  
FAX 66-1314



## 芦加茂分教会

昭和56年11月26日 設立  
昭和56年12月4日 鎮座祭  
昭和56年12月5日 奉告祭

本年の活動目標

## 「おぢぼがえり」

- ・「喜びいっぱいのおたすけ」を目指し、さあ、おぢぼに帰ろう。
- ・「人だすけのおぢぼがえり」を通して、ぢぼ一つに心を寄せよう。

立教185年  
2月号

大教会長様お話

喜びいっぱいのおたすけ目指し

さあ、おちびがえり

1・20年頭会議において

立教185年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。

大教会長様は、就任後、初めての年頭に当たり、先ず、制限下での記念祭・奉告祭が無事につとめられたことの御礼を述べられた。

続いて、真柱様年頭のごあいさつ、また、記念祭・奉告祭のメッセージを引用され、「教祖140年祭三年千日活動」を来年に控えた本年の大教会の活動目標を、心をおちびに向け、人だすけのための「おちびがえり」をと打ち出された。

最後に、地域社会に根付き、地域から必要とされる教会を目指して、喜びいっぱいにおたすけに向かえるよう、日々、弛まず努力されるご自身の胸中を披瀝された。なお、恒例の会食はコロナ禍のため中止。

立教185年、明けましておめでとうございませう。

昨年、大教会創立130周年記念祭を、コロナ禍にあつて参拝者を制限してという形ではありましたが、笠岡に繋がる皆さんの真実のお心寄せをいただき、無事につとめることが出来たことは、本当にありがたく嬉しく思います。誠にありがとうございました。

記念祭に向かう間、大勢の方が準備ひのきしんをおつとめいただき、神殿正面の石畳や壁は驚くほど白くきれいになり、来賓の先生方をお出迎えすべく花々が飾られ、雨樋や手摺りなど金属部分は黒々とした美しい色に塗り替えられ、神殿内から見下ろす中庭のレンガブロックは鮮やかな色を取り戻し、客殿に向かう渡り廊下のガラス窓はきれいに磨きあげられ、隅々まで掃除の行き届いた客殿から見える庭の景色は美しく整えられておりました。

そのような状態で、来賓の先生方をお迎えし、記念祭をつとめることができたこと、また、当日の様子をインターネットを通して、遠く離れた海外の信者さん、日本国内でも、参拝が叶わなかった信者さん方に観ていただけたことを、本当に嬉しく思います。

重ねて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

新しい年を迎え、今日は年頭会議とすることで、先ず、天理時報に掲載された真柱様の年頭のごあいさつを読ませていただきます。

▼真柱様年頭あいさつ

真柱様は冒頭、新年のあいさつを述べるとともに、さまざまな制約のある中での昨年1年間の一歩のつとめをねぎらわれたうえで、「今年も心そろえておつとめいただきたい」と話された。

この後、教祖の年祭について話を進められた。その中で、10年に一度、年祭を勤めるということになれば、立教189年が教祖140年祭の年に当たり、来年は140年祭を目指す三年千日の動きに入っていくとして、「道を伸展させるためには、いろいろな意味において、教祖の年祭を勤めることは大切なことだと思ふので、次の140年祭は勤めさせていいただきたい」と述べられた。

さらに、ご自身が関わった教祖年祭を振り返られたうえで「教祖の年祭を勤める意味を徹底させることは、本当に難しいことだとあらためて思う。や

はり、伝える側の責任は大きい」と指摘。「伝える側の姿勢としては、信仰姿勢、普段から教祖の教えられたことを身に行い、なるほどの人になる努力をすることを怠つてはならない。その人の信仰から伝わるということはある」と強調された。

最後に真柱様は、感染症がこの先どのようになるかは予想もつかないとして、「安心して御用ができて、できなくても、時間は同じように過ぎていく。できないのはコロナのせいだというようにせずに、与えられた条件の中で、やらなくてはならないことをいかに進めるかということ、いまの時局を考えて、それぞれのつとめを果たしていただきたい」と述べて、あいさつを締めくくられた。

(『天理時報』立教185年1月19日)

▼本年の活動は「おちびがえり」

昨年、記念祭をつとめ終えた私たちが目指すべき次なる家は、真柱様が「勤めさせていただきたい」との思いをお聞かせくださった「教祖140年祭」です。この教祖140年祭に向つて、笠岡大教会としては、今年1年の活動は「おちびがえり」——おちびがえりを主眼に

置いてつとめさせていたきたいと思  
います。

▼心をおぢばに向け、

人だすけのためのおぢばがえりを

なぜ「おぢばがえり」なのか。――  
それは、陽気ぐらし世界の実現に向っ  
て私たちのすべきことは、やはり「人  
だすけ」だと思ふからです。

人にたすかってもらうには、教祖の  
教えを実践し、おつとめをつとめるこ  
と、おさづけを取り次ぐことはもちろ  
ん大切なことですが、同時に、おたす  
けをする者の「心の向き」が、たすけ  
の元である「おぢば」の方をしつかり  
と向いていないといけないと思ふから  
です。

コロナ禍で、おぢばでの様々な行事  
(正月のお節会・こどもおぢばがえりな  
ど)が中止になり、おぢばがえりをす  
る機会が減ってしまったいます。

青年会本部の例会もずっとオンライ  
ンで行われていましたが、昨年10月に  
久しぶりに、陽気ホールで開催された  
例会後に出合った同級生が「この例会  
がなければ、おぢばに帰ってくること  
ができなかった」と言っており、そう  
いう状況の方もおられるわけです。

コロナ禍下で、「おぢば」が、物理  
的ではなく、少し、遠くなってしまっ  
ているように感じます。

真柱様は、昨年の記念祭において、

教祖の教えは、変わることはない  
のであります。しかし人の心の向  
きは、時折思い直すことが必要だ  
と思ひます。自分たちは毎日一生  
懸命に勤めているつもりであつて  
も、うつかりすると、最初目的と  
したのとは違ふところへ進むよう  
なことをしているかもしれませ  
ん。それが小さなずれであつても、  
万一そのことに気付かず進んでし  
まったならば、やがては大きな狂  
いとなり、目的地を見失つて、大  
変な結果を招いてしまうことにな  
りかねないのであります。

と、メッセージをくださいました。  
今、コロナ禍下で、おぢばがえりが  
しづらい状況ですが、だからこそ、「お  
ぢばがえり」を通して、「心の向き」  
を「おぢば」にしつかりと向きたいの  
です。

そのために、今年は、とにかく「お  
ぢばがえり」をしていただきたい。  
ただ、今、日本では、余りにも速い  
スピードでコロナの感染者が広がつて

います。いろんなことが難しい状況に  
なるでしょうが、この1年の中で、チ  
ヤンスを見つけて「おぢばがえり」を  
していただきたいのです。

そして、この「おぢばがえり」は「人  
だすけのためのおぢばがえり」として  
いただきたいのです。

もちろん、ただ帰らせていただくだ  
けでも、大きな意味があり、大きなご  
守護をいただける

でしょうが、その「おぢばがえり」  
を「たすかつてもらいたい人のための  
おぢばがえり」として行つていただく。  
今年1年は、「人だすけのためのお  
ぢばがえり」を通して、おぢばにしつ  
かり「心の向き」を合わせ、おぢばに  
心を寄せる、そのための1年としたい  
と思ひますので、どうぞ、宜しくお願  
いいたします。

▼理想の教会像を目指して、  
弛まぬ努力を

昨年7月に会長の理のお許しを戴い  
て会長とならせていただきました。そ  
れ以来、今、この現代社会にあつて、  
教会のあるべき理想の姿とはどんなも  
のだろうと、自分なりに想像してみる  
と、教会が地域社会に溶け込んで、そ

して、活発におたすけをする姿、地域  
に根付き、地域から必要とされて、そ  
して、そこに関わる教会の人たちが、  
喜びいっぱいにおたすけに向つてい  
る。そんな姿が思い浮かびます。

そんな姿を思い浮かべながら、私自  
身は、悩んだり迷つたりばかりしてい  
ます。こんなことは言うべきではない  
かもしれませんが、今日のお話もこれ  
で良いのかと、いつも自問自答しなが  
らお話ししています。

明日の春季大祭も、参拝者を制限し  
ました。今の状況下で、皆さんに「ど  
うぞ、参拝してください」とは、とて  
も言うことができないと思つたからで  
す。

おつとめ奉仕人・直轄教会長のみで、  
明日の春季大祭はつとめさせていた  
きます。このことも、一日中、迷いま  
した。いろんな方に意見を聞いて、話  
を聞きたびに、コロナと自分の考え  
が変わつて、でも、やはり、この状況  
では参拝者の制限をするしかない、そ  
う考へて、決めました。

しかし、やはり、どこか心残りがあ  
るのです。「本当なら、大祭にお帰り  
いただいて参拝していたはずの人が、  
私の決めたことによつて来られなくな

る。おつとめを、おつとめを参拝をしてもえなくなる。もう、何て、何て申し訳ないんだ。でも、今、この状況では決めないといけない。」のです。

情けないことに、私は、まだまだ、本当に、決断が遅くて時間が掛かりますが、1個1個、今、その「決断」をしています。

間違えるときもあるでしょうから、そのたびに、それを修正して、直して、会長として、より良い教会の姿を目指していきたいと思います。

年頭のごあいさつで、真柱様は、安心して御用ができて、できなくて、時間は同じように過ぎていく。できないのはコロナのせいだというようにせずに、与えられた条件の中で、やらなくてはならないことをいかに進めるかということ、いまの時局を考えて、それぞれのおつとめを果たしていただきたい

また、昨年の記念祭において、**教会長は、教会の責任者であり**ます。しかしそれは、成人を遂げ

たからというわけではないと思います。親神様から御覧になれば成人への道中にあるという点に於いては皆と同じでありますから、これまで勤めてきた歴代会長の見習うべきところは見習い、日々会長としての勤めを果たすことにより、教会に関わる人々から一層信頼され、慕われる教会長になるように努力を重ねてもらいたいと思います。

と、メッセージをいただきました。会長を交替してから初めて迎えるこの年頭において、少しばかり、今、私が、会長になって思っていることをお話ししました。

本当に迷ってばかりの、決断が遅い者ですが、日々、自分に出来る精一杯で会長のつとめを果たす中で、少しずつ成人を進めていきたいと思います。今年1年、私自身も「おたすけのおちびがえり」を通して、しっかりと「おちび」に心を向け、心を寄せて通りたと思いますので、皆様方におかれまして、今年1年は、どうぞ、しっかりと「おちびがえり」を進めていただきますようお願いいたします。

春季大祭講話

人だすけのおちびがえりを通して  
ちび一つに心を寄せよう

大教会長様

立教185年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと、コロナ禍のため、おつとめ奉仕人・直轄教会長のみで執り行われた。

**大教会長様は、先ず、記念祭・奉告祭も含め、制限下の中、おつとめをつとめることが出来たこと**のありがたさを述べられた。

続いて、**春季大祭の意義を述べられ、思召にお応えするには、教えを求め行いおたすけに励むことが大切**とすけで、**たすけの元であるおちびにしっかりと心を寄せることが大切**だと述べられた。さらに、**本年の活動目標である「おちびがえり」をどのように進めるかを、つづさに述べて、今年1年の歩みを促された。**

ただ今は、笠岡大教会の立教185年の春の大祭を、ともどもに陽気に勇んでつとめさせていただくことができまし

た。誠にありがとうございます。本日は、春の大祭をつとめる意義に併せて、笠岡大教会の今年1年の動きについてお話ししたいと思います。

始めに一言、御礼を申したいと思います。

昨年10月24日に創立130周年記念祭並びに6代会長就任奉告祭を執り行い、コロナ禍下で、参拝者を制限しました。今日の大祭も人数を制限しています。

記念祭も今日の大祭も、ここにはおられない方、ここに来られなかった方が大勢おられますが、そういう方々の真実の心寄せをいただいて、こうしておつとめをつとめさせていただけると、このことを、先ず、胸に置きたいのです。

おつとめをつとめることが出来たこと、ありがたさを、ここにおられない方々のお陰でもあるということ。あらためて、無事に記念祭を、そして、今日の大祭をつとめさせていただけたとの御礼を申し上げたいと思います。誠にありがとうございます。

▼たすけの元はおちび

春の大祭の意義は、明治20年陰暦正

月26日に、教祖が現身をお隠しになられた、この大節を元一日として、親神様・教祖の思召をしっかりと心に納め、さらには、その思召にお応えすることにあります。

では、この大節に込められた思召とは何かと言うと、おさしづに

子供可愛い故、をやの命を二十五  
年先の命を縮めて、今からたすけ  
するのやで。(M20・2・18)

とありますように、こどもかわい  
いっばいの親心から、教祖は定命を縮  
めてまで、世界たすけに出られました。  
すなわち、一刻も早くたすけてやり  
たい、一刻も早く心の成人をさせてや  
りたいとのをやの思召が込められてい  
るのです。

このことを、春の大節をつとめるに  
当たり、しっかりと心におさめたいと  
思います。

そのうえで、この思召にお応えする  
には、教祖から教えていただいた教え  
をしつかりと先ず求め、そして、日々、  
実践して通り、悩み苦しむ人のおたす  
けをしないといけません。

「たすけの手段」として、「つとめと  
さづけ」をお教えいただいています。  
おつとめをつとめること、おさづけを

取り次ぐことが大切なのは言うまでも  
ありませんが、それと同時に、忘れて  
はいけないのは、親神様・教祖にお働  
きいただいて人にたすかってもらうに  
は、そのための「理づくり」が大切だ  
ということと、「たすけの元」は「お  
ちば」だということです。

親神様がお鎮まりくださり、教祖が  
御存命でお働きくださっている「おち  
ば」に、しっかりと心に向けて心を寄  
せることが大切です。

#### ▼「心の向き」をおちばに合わせる

昨年の記念祭にて、真柱様は、メッ  
セージの中で、

教祖の教えは、変わることはない  
のであります。しかし人の心の向  
きは、時折思い直すことが必要だ  
と思います。

と述べられました。

また、おさしづに、

ちばに一つの理があればこそ、世  
界は治まる。ちばがありて、世界  
治まる。(M21・7・2)

また、

ちばという理を第一心に治めにや  
ならん。(M25・2・23)

また、

元という、ちばというは、世界も  
う一つと無いもの、思えば思う程  
深き理。(M28・10・11)

とあります。

「おちば」は、「人間・世界の元」で  
あり、「たすけの元」である。この「元」  
が重要で、それを外してしまつてはい  
けないと教えていただきます。

また、おちばに心を寄せることの大切  
さを思うときに、一つの教祖のご逸  
話が思い浮かびます。

一八七 ちば一つに

明治十九年六月、諸井国三郎は、  
四女秀が三才で出直した時、余り  
悲しかったので、おちばへ帰つて、

「何か違いの点があるかも知れま  
せんから、知らして頂きたい。」  
とお願ひしたところ、教祖は、

「さあく、小児のところ、三才  
も一生、一生三才の心。ちば一つ  
に心を寄せよ。ちば一つに心を寄  
せれば、四方へ根が張る。四方へ  
根が張れば、一方流れても三方残  
る。二方流れても二方残る。太い  
芽が出るで。」

と、お言葉を下された。  
この世界は心通りの守護の世界だと  
お教えいただく私たちは、何か良くな

いことが起こったとき、自分に何か心  
得違いがあつたのではないか、自分が  
何か心得違いをしていたから、それを  
親神様が、身上や事情でお知らせくだ  
さつたのかと考えます。

もちろん、その考えは間違つてはい  
ませんが、このご逸話では、「これが  
悪かつたからこうなつた」という因果  
を越えて、もつと大切なことを教えて  
くださっているように思います。

それが、「おちばに心を寄せる」と  
いうこと、わが子の出直という大節を  
通して、教祖は「ちば一つに心を寄せ  
れば、四方へ根が張り、太い芽が出る」  
とお教えくださっているのです。

#### ▼人だすけのおちばがえり

そこで、笠岡大教会では、今年の活  
動目標を「おちばがえり」としたいと  
思います。

今年の年頭に、真柱様から、「道を  
伸展させるためには、いろいろな意味  
において、教祖の年祭を勤めるという  
ことは大切なことであるので、勤めさ  
せていただきたい」との思召をお聞か  
せいただいた立教189年の「教祖140年  
祭」、これが、記念祭をつとめ終えた  
私たちが目指す次なる塚になります

が、これに向って、来年には、ご本部から三年千日の動きの発表があるかと思えます。

大教会としては、この140年祭に向っての今年1年は「おちばがえり」を主に置いて進めていきたいということです。

ただ、現在のコロナ禍下では、大勢でのおちばがえりは難しい

でしょうから、教会単位や家族単位といった形での「おちばがえり」を計画し、実行していただきたい。

そして、ただ、おちばに帰らせていただくだけでも、大きな意味があり、大きなご守護を頂戴できますが、このたびの「おちばがえり」は、具体的なおたすけの対象を決めて行っていたらきたいのです。「人だすけのためのおちばがえり」としていただきたい。

今、日本では、今までにない勢いでコロナ感染者が増加しています。

今すぐおちばがえりというのは難しく、おちばに帰られない期間が、まだ続くかと思いますが、この期間は、「おちばがえりの準備期間」として、たとえば、教典や逸話篇をひもといて、教えを身につける、教祖のひながたを求める、そういった時間にしていただき

たいのです。

天理王命、教祖、ちばは、その理  
一つ (典4章)

であるとお聞かせいただきます。

おちばに帰られない期間、教えを求める、をやるの思いを求める、をやるの思いにその心を寄せることが、私は「ちば一つに心を寄せ」ることに繋がると思います。

そして、この「おちば」への思いを、教会であれば信者さん、家族であれば兄弟・子供や孫に、しっかりと伝え、共有して、このたびの「おちばがえり」は、「人だすけのおちばがえり」としていただきたい。

そのうえで、おちばがえりを通して、ちば一つにしっかりと心を寄せ、「人だすけのおちばがえり」を楽しみに、今年1年、勇んでお通りくださいませよう、お願いいたします。



# 談話室



## 今こそ、おつとめで

### 祈りを捧げる旬

米美分教会長 三代 信行

小さな教会ではあるが、毎朝一時間程かけて神殿掃除をさせて頂いている。

朝の凜とした空気の中、お社等の掃除をさせて頂いていると、フツと頭に浮かぶ事がある。「ふと浮かぶが神心、それを消すのが人間心」と聞いた事がある。神様に一番近い所での御用の最中に思い浮かばせて頂くその時の事を、私は、親神様、教祖からのお知らせである。と、大事にしている。

コロナウイルスの流行による、最初の緊急事態宣言の一昨年4月、修養科教養掛として1か月詰所で生活させて頂いた。3月、4月の月次祭、又教祖誕生祭も祭典中は境内地にも入れないので、修養科生も詰所で遥拝、詰所の宿泊者もほとんど無い状態だった。

しかし、その中で私が感じたのは、祭典中以外は、マスク、消毒、間隔を空ける等の予防措置を取れば、神殿を

始め、教祖殿、祖霊殿へも参拝出来る。おちばでは今までと変わらず、親神様、教祖が待っていて下さる、という事だった。

そうして教会へ帰り、朝の神殿掃除の最中に、ふと「私のこの仕事って何だろう?」と思いついた。「そうだ、宗道家だ。」では、宗道家って何だ? 「昔から、災害が続いたり、疫病が流行ったりしたら、神社や寺を建てたりして平癒を祈って来た。そしてその祈りに携って来たのが宗道家ではないのか。」と。

コロナウイルスという疫病に、世界が難儀している今この時に、祈りの最中であるおちばでのかんろだいつとめに、現地で祈りを捧げる事は、今を生きる宗道家として必然な事であると思つた。

幸いおちばへは、自家用車で行っていたので、それまでと変わらず、毎月車でおちば帰りをさせて頂いている。人との接触をしないよう移動し、本部駐車場で車中泊し、祭典参拝後、非接触で帰った事もあったが、宿泊者が無い詰所も大変なので、詰所に宿泊するようにしている。

しかし、自教会にも基礎疾患のある者や、教育機関で働いている者等もある

り、帰宅後2週間は家庭内隔離で、一人自室で食事もしていた。

そんなさ中も、5年程前から始めた、地元「道の駅」前での神名流しと路傍講演は、ずっと続けさせて頂いている。片側1車線の国道の反対側からハンドマイクで話しているの、感染の心配もないと思う。

そこで私は、「祈る」という事について話をし、神様でも仏様でも、どこに向っても良いから、コロナ禍からの世界の治まりを祈って欲しい。祈る対象と方法が解らない人には天理教の教会では、毎朝に夕に、そして天理市にある天理教本部では毎月26日、夫々の教会でも毎月日を決めて、おつとめというものを通して祈りを捧げているので、近くの天理教教会へ行ってみて下さい。というお話しをしている。

又当教会では、教祖130年祭活動として大教会から提示して頂いた「おたすけ・お願いカード」と、毎日お願いつとめを、年祭後も継続させて頂いている。思い浮かぶ個人の名前と共に、コロナ感染が始まってからは、「コロナウイルスで苦しんでいる人々、終息」との1枚も加えている。現在、教会としては、年祭直後の3倍程の枚数になっている。

ところで、前述の不要不急、県境を跨いでのお出かけ帰りについて、同じ笠岡の人達、又支部、教区等地域の教会長さん達と話しをさせて頂くと、周りの環境や、その人の考え方等色々違いがある事を考慮しても、本部から「夫々の教会、布教所等で参拝するよ

うに」と、言われているからおちばへは行かない、という意見が多く、私の考えが、皆とは違っておかしいのだろうか?」と思った。

と、そこで頭に浮かんだのが、私の信仰初代の入信の動機であった。

明治時代、丁度今の様に、コレラの流行の波が何度もあったようである。明治28年米府分教会初代三代幸之助は、コレラに感染した伯母の見舞に行った。夜、なわで囲み病室にしていた離れの部屋の床下から床を叩く音がする。床板をはがすと、下から入ってきたのが天理教の布教師であった。人目をさけて、夜中に床下からコレラの病人のおたすけにやってきました、その布教師の態度と、お話に感動して入信、その年のうちに用木となり布教に出たのが、信仰の始まりだと聞かせて頂く。私の兄である米府分教会前会長も、会長を辞す一昨年9月までは、毎月お

ちばへ帰り、境内地に入れない月でも、イスを持参して本部駐車場で参拝していたし、引き継いだ現会長も、毎月おちばに帰っていることを思う時、初代の信仰につながる魂が、おちばへと運ばせているのかな、と思う。

折りしも、大教会年頭会議で、大教会長様は、本年の活動の上でおちば帰りに言及された。今、米府初代の心を動かした布教師のような事は、現実難かしいとしても、やり方を工夫すれば出来る事も有るのではないかと考える。私はこれからも、リモートではなく、直接おちばへ足を運び、一日も早く世界中でのコロナ禍で苦しむ人々の救いを祈っていききたいと思う。

## 陽だまり56

### 一握の土

ビエン・J・K

ハチドリという鳥がいる。英語ではハミングバード、体長が10cmにも満たない小さな鳥である。ハチドリは、空中でホバリングしながら長くくちばし

で花の蜜を吸う。その時の羽音が蜂に似ているところから名づけられたという。

「ハチドリのひとしずく」(辻真一・明治学院大学教授監修、光文社)では、『これは、ちいさな力の大切さを教えてくれる南米アンデス地方の古くてあたらしいお話です』と、次のような話を紹介している。

森に火事が起きて動物たちは、われ先にと逃げ出している。でも、クリキンディという名前のハチドリだけは、くちばしで一滴ずつ水を運んで火の上あきわらに落としていく。他の動物たちは嘲笑あざわらうが、

「私は、私にできることをしているだけ」と、クリキンディは答えた。

(本文要約)

この話の続きはなく、あとは自分が感じたままのストーリーを膨らませていけばいい。

私はこの話を初めて聞いたとき、ある情景を思い出した。

平成15年6月、天理教教会本部で「西境内地拡張整備ふしん土持ひのきしん」が始まった。教祖120年祭に向けて

の活動の一つだったと記憶している。重機を使えば短期間で済んでしまう土木工事を、人が「もっこ」を担いでするのだから、ビジネス的に考えればまことにコストパフォーマンス(費用対効果)の低い活動であると思う。しかし、そこには決してコスパという考えだけでは計れない意味と喜びがあった。親神様からの借りものである体を使い、おぢばのふしんに伏せこませていただいている喜びがあったのだ。

ある夏の日、別席を運ぶために帰参した甥っ子とこのひのきしんに参加した。そこで私は、ある女性の姿を目撃して目頭が熱くなった。車椅子に乗った彼女の膝の上には真っ白なハンカチがおかれていた。その上にほんの一握りほどの土を乗せ、落とさないように大切に、何度も運んでいるのだった。これこそが信仰の喜びなんだと実感した。人から褒められたいとか、社会的評価を得たいとか、何かの恩恵を受けたいとかという「よく」の心からではなく、何が今の自分にできることなのだろうか。一握の土が大きな意味を持って、私に問いかけて来る。

## TENRIKYO

おつとめをする

- 朝つとめ・夕つとめ
- 日参のすめ
- 月次祭に奉仕する
- お願いづとめ
- お手振り・鳴物を学ぶ 追加 UPDATE

ひのきしんをする

- 身近なところから始めよう
- 全教一斉ひのきしんデー
- ひのきしんを学ぶ
- 福祉に関わるひのきしん

おぢばがえりをする

- おぢばがえりに際して
- 参拝のしかた
- 祭典・行事 更新 UPDATE
- おぢばの施設

にをいげをする

- まずは身近なところから
- 我が子に信仰を伝えよう
- にをいげの“ひと工夫”
- にをいげに活用できる講座
- 全教一斉にをいげデー

おたすけをする

- おたすけに際して
- 身上のおたすけ
- 事情のおたすけの心構え
- おたすけに関する読み物

天理教のホームページには、「本部からのお知らせ」・「お道のニュース」の他、上図のように、「教理」についての項目や、「諸活動の案内」など、様々な項目が設けられており、一般の方もご覧になっています。「おぢばがえり」を打ち出された本年は、特に、「おぢばがえりをする」・「おぢばがえりに際して」などの項目には目を通しておきましょう。



# 春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原明勇慎んで申し上げます

親神様には「人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」との思召から人間世界をお創造り下されたばかりでなく天然自然のお働きをもって陽気ぐらしへとお導き下さるご慈愛の程は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は日々を結構にお連れ通り頂いている事を日夜御礼を申し上げますと共に御恩報じを思い念じてたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にも今月は教祖がおつとめを急き込んで世界ろくちに踏み均しに出られた尊い月に当たりますので只今からおつとめ奉仕人一同おつとめをつとめられる喜び一杯に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて立教百八十五年の春の大祭を執り行わせて頂きます

御前には寒さ厳しき中も厭わず寄り集いました道の子供たちが事改めて御高恩に御礼申し上げ 共にお歌を唱和する皆の真実の状をご覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて私共は 昨年勤めさせて頂いた創立百三十周年記念祭の成人の歩みを台として 次なる塚教祖百四十年祭に向かつての更なる成人の歩みを進めるべく今年「おぢばがえり」を主眼に活動を進めさせて頂きます 日本では現在急激にコロナ感染者数が過去最多を更新しながら尚増加しています これまで以上に難しい状況が続きますが そんな中だからこそ たすかりの元であるおぢばにしっかりと心を寄せるべく努め励ませて頂く所存でございます 何卒親神様には 先の見えない難渋の中でも親を信じて慕う皆の誠真実の心をお受取り下さいまして お望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますよう御守護お導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

## 訃報

### 砂流勲氏

輝伯分教会元会長

7月9日出直されました。

享年 80才

### 横山ミキ工姉

東城分教会前会長夫人

8月22日出直されました。

享年 93才

### 丸山勤氏

木津和分教会前会長

8月27日出直されました。

享年 89才

### 竹本勤市氏

福芦分教会前会長

9月27日出直されました。

享年 97才

### 矢田路子姉

八尋分教会前会長夫人

1月14日出直されました。

享年 90才

### 重政富子姉

仲條分教会三代会長夫人

2月8日出直されました。

享年 98才

### 田林志計實氏

大教会承事

東悠分教会二代会長

2月8日出直されました。

享年 95才

### 福島悦子姉

福満分教会三代会長夫人

2月14日出直されました。

享年 93才

### 三宅八壽夫氏

稲芳布教所長

2月14日出直されました。

享年 86才

※昨夏以来、お知らせが滞つてしまい、関係者の皆様には、ご迷惑をお掛けいたしました。



立教百八十五年 春季大祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	てをどり	おつとめ	地方	役割	区分	講話	祭主	祭主		
												大教会長様					大教会長様	大教会長様
												大教会長様					大教会長様	大教会長様
今川佐智子	内海安子	上原順子	森本忠善	今川昌彦	横山逸郎	中村剛	岡崎真一	吉岡誠一郎	田中ますみ	前奥様	大教会奥様	上原繁道	前会長様	大教会長様	三島渉	吉岡壽		
岡崎和美	三島照美	森本富美子	赤木素志	高木昭祥	虫明立生	武内清明	山田敏教	浅野明教	中村初美	門脇加津	武内正美	山野弘実	三島渉	門脇元教	渡邊隆夫	佐藤道孝		
菅尾一美	室悦子	岡崎豊子	三代温生	岡崎真一	今川昌彦	岡田誠	内海史郎	上原繁次	田中つかさ	吉岡八恵	横山小智榮	横山逸郎	吉岡誠一郎	田中隆之	佐藤真孝	上原志郎		
													三月講話	武内正美	指図方	上原繁道	賛者	浅野明教



今年の元日

今年の元日は穏やかな晴天に恵まれ、午前8時から10人に満たない人数だったが、いつもと変わらぬ顔ぶれで元旦祭をつとめさせて頂いた。

不思議な事に(毎年の事だが)おつとめも後半が終わる頃になると中年のおじさま方が次々と現れるのだ。今年の正月は県内ではコロナウイルス感染者の数もまだ小康状態だったのでおつとめ・教祖殿行事を終え、例年と変わらず酒にお節料理・雑煮と強い感染対策の縛りもほどほどに召し上がって頂いた。それぞれの家庭での予定もあるの

で足早に帰る人が多い中、いつも最後まで賑やかに残ってくれるのはおつとめの終わる頃にやって来る常連のおじさま方だ。

しかし、将来のおつとめ奉仕者になるかもしれないこのおじさま方は大変貴重な人材である。ゆっくりと我が家で寝正月をする事も出来るのにわざわざ足を運んでくれ、教会で寛いで下

さっている。私の心の中は、「このおじさま方が、おつとめ着を付けてくれるのは自分の信仰姿勢がしっかりとお道のルールに乗ってからのなんだろうな？」と思いつながらみんな楽しんで気な会話をしている中、重鎮である昔の青年さんが、「少し暖かくなったら又、昔の様に日帰りの旅行でも計画しないか？」と提案した。確かに今は県外への移動が自粛と言われる中だが、以前は「別席伏せ込みひのきしん団参」を機会に年に一度はおぢばに帰らせて頂き、その帰りの観光を楽しみにマイクロボスを出していた。それが唯一信者さん達がおぢばがえりをする機会だったのだ。

大切な事は、まず教会に心を向けて頂けるようその人たちに興味のある何かしら楽しみの中からも繋ぐ心を大事にし、今までの教会の有り方や自分自身の人に対する態度も再確認しながら、教会に来られる人たちが窮屈にならず、私自身が喜び勇んで教会生活を送る様つとめなければいけないな、とその人の提案のお陰でこれからのお道の中で歩むべき道筋の気づきを頂いた様な今年の元日だった。

(む)